

ています。

当時に比べると、日高川の堤防が高くなり、浚渫をして川床も低くなっているため、水害の発生確率は低くなっているかもしれませんが。しかし、自然に絶対ということはないので、昔の自分の様に「今回は大丈夫だろう」と思っていると、いつ痛い目にあうか分かりません。

実際、平成23年の台風12号による大雨災害（紀伊半島大水害）がありました。あの時は、水害への恐怖から早くから避難所に避難しました。幸いにも堤防が決壊することは無かったですが、自分の命は自分で守れるよう、早めの避難と事前準備を心がけています。



橋本 由枝さん
(蘭)

当時、中学生の私は、小さい妹や弟、近所の子どもたちの手を引

いて昔の御坊中学校（今の市役所南側）に逃げました。それから中学校に船が来て、大人がくれたおにぎりを食べたことを覚えています。

水が引いて、家に帰れたのは次の日の夕方ごろでした。家の2階まで浸水していて、逃げる前に2階に移した麦がすべてダメになっていました。

そこから毎日家の泥を運ぶ作業をしました。一輪車に泥が入ったバケツを3つ載せて運びましたが、道も今みたいにきれいに舗装されていなかったもので、重たくて、つらくて、やめたくなることもありました。それでも、地域住民同士が協力して、ゆっくりですが着実に元の生活に戻っていききました。

私の夫（故 橋本 克彦さん）も水害の被害を受けた一人です。

夫は当時17歳で、天田の製材に勤めており、帰りに濁流に流されたそうです。旧天田橋の橋脚につかまって一夜を過ごし、何とか一命を取り留め、翌日水かさが減ったところで脱出しました。

夫は生前、「橋脚から流されていく人や家屋をただ見ていることしかできなくて悔しかった。自分も生きた心地がしなくて、母親に会いたいとずっと思っていた。」と話していました。そのとき助けることができなかった悔しさと自分の命が助かった感謝の気持ちを込めて、水害の次の年から毎年7月18日に、お酒を日高川に流して供養を続けてきました。

夫は亡くなるまで、67年間供養を続け、私も一緒に参りさせてもらっていました。今は地域の方に協力してもらいながら毎年供養をしています。

このような大水害があったことを風化させてはならないという思いと、次の世代に伝え・繋いでいきたいという思いを持って、これからは夫が始めた供養を続けていきたいと思っています。



7.18 水害を教訓に――

お二人とも地域での助け合いや、普段から助け合える関係性を構築する重要性、このような災害があったということを風化させず、後世に伝えていきたいという思いを話されていました。

7.18水害は、昔の話だからといって私たちに無関係な話ではありません。近年増加している線状降水帯などの異常気象による水害がいつ発生してもおかしくない状況です。最近も6月2日の大雨によって県内でたくさんの方が被害が出ました。

次のページ（P4）では、事前にできる備えや御坊市の取り組みを紹介します。